

形のないレトロを追いかけて

漁村が見渡せる山の斜面にある専教寺に登る。ここに限らず、下関には実に神社仏閣が多い。それも土地それぞれの歴史が刻まれているのが実感できる杜寺ばかりなのだ。

特牛の魚市場付近には、北海道松前港の船や鳥取県境港の船が停泊していた。北前船時代をしのばせるものがあつた。

下関市街へもどる途中、二見の漁村にも立ち寄ってみた。百軒もない

と思われる小さな漁港沿いに、特牛と同様、風情ある町並みが残る。こ

のような観光地ではない街には、町の匂いというものを感じる。それは長い歴史に培われたもので、私のよくなよそ者だからこそわかる匂いというものである。軒下の燕たちにとっても住みやすい場所なのだろうと思つた。もちろん、猫たちにも。

久しぶりにゆったりとした時間を過ごせた旅だつた。こうした漁村には、目には見えないレトロ感があるようだ。 **083**



「龍の尻尾にも目玉が！」と専教寺のご住職に語りかける（上と右下）。写真を撮れば必ず手を合わせる町田さん（左下）。



「花がある家が多いね。やすらぐねえ」。通り過ぎては振り返る二見の散歩。





上のような廃屋に出くわすことも度々で、洋館建築（左中）をかつての郵便局と言い当てれば、平佐さん夫妻（左写真の2人）が感心していた。

テラコッタの秘密と誤解

しばらく行くと左手に明らかに他の民家とは異なる三角屋根のある洋風建築があった。これはただものではない。おそらくその様式からして昭和初期頃に建てられたもので、外観にテラコッタと呼ばれる装飾がモ

ダンな雰囲気醸し出している。

私の体験からするとこの手の建物は、医院や写真館、郵便局などとして建てられていることが多い。この答えは後に判明した。この路地もその先、うねうねとしており、さらに枝のような幅一メートルほどしかない小道に入り込んでみると、古い蔵のある場所に出た。その蔵はすでに使用されてはいなく、部分的に土壁が落ちて、その下の竹材が露出しているものの、むしろそれがその蔵の造られた経過を知ることができ、私にとっては大いに参考となった。

ちょうど蔵の横の庭にいた、地元平佐絃之さんと優紀美さんご夫婦によると、この蔵はかつてここにあった洋品店のものだという。カメラを持った私を見て、解体業者かと思ったそうである。ここで前出の洋館がかつて何であったかを聞くと、旧郵便局とのこと。現在は近くに移転してしまっており、今は住居として使用されていることがわかった。私の推測は的中していたのだった。